

北海学園大学
日本語教員
養成課程

『報告書』第6号

北海学園大学
2020年3月

目 次

1. 国内、海外での日本語教育実習と大学連携日本語 パートナーズによる海外の大学生、教師との交流	中川かず子	2
2. 2019年度 韓国大田大学での日本語教育実習プログラム		3
3. 国内日本語教室での実習を体験して【日本語教育特別演習】	本間 由乃	4
4. 韓国大田大学での日本語教育実習	越前 梨	6
5. 韓国大田大学での教育実習を終えて	嶋守 咲季	8
6. 韓国大田大学での教育実習を通して	高橋 莉奈	10
7. 韓国大田大学での日本語教育実習	千葉 朱里	12
8. 韓国大田大学での日本語教育実習	上野 汐音	14
9. 韓国大田大学での研修を終えて	吉住 一生	16
10. 韓国大田大学での日本語教育実習を終えて	能戸 麻紀	18
11. インドネシアでの文化体験 —日本語パートナーズを通じた経験	佐藤 ゆき	20
12. インドネシア・ブラウイジャヤ大学での 日本語教育と文化交流	高本 寛也	22
13. インドネシアで日本語を教えた経験	越前 梨	24
14. インドネシア・ブラウイジャヤ大学での文化交流	高橋 莉奈	26
15. インドネシアでの文化交流—ブラウイジャヤ大学での体験	千葉 峰弘	28
16. インドネシア・ブラウイジャヤ大学での文化交流	千葉 朱里	30
17. インドネシアでの文化交流—パートナーズを通じた体験	中村ちひろ	32
18. 日本語パートナーズ—ブラウイジャヤ大学での交流	三浦 夕奈	34
19. 日本語パートナーズを通して得た経験	嶋守 咲季	36
20. 日本語パートナーズ・インドネシアでの交流を通して	山本 将輝	38
21. 日本語教育現場体験報告 ～国際交流基金関西国際センターでの異文化交流～ 中村ちひろ、能戸 麻紀、門間 未来、前山 若菜		40

国内、海外での日本語教育実習と 大学連携日本語パートナーズによる 海外の大学生、教師との交流

日本語教員養成課程委員長・人文学部教授 中川かず子

2019年度報告書（第6号）では、I. 韓国大田大学とボランティア日本語教室での日本語教育実習体験の報告、II. 大学連携日本語パートナーズによる海外の大学生、教師（インドネシア）との交流報告を取り上げています。

韓国大田大学での日本語実習は「日本語教育特別演習」の科目履修として学生達に参加してもらいますが、今年度は3年ぶりに7名（2部2名を含む）の参加者があり、2週間の間密度の濃いプログラムにより教育指導が行われました。大田大学のほかの提携大学（熊本学園大学）が参加を見送った今回、本学学生達は二人の先生方から厳しく、かつ丁寧に集中指導を受けることができました。その体験報告から、充実した時間を過ごすことができた満足感が伝わってきます。模擬授業でなく、韓国人初級学習者、中級学習者、中上級学習者を相手に、真剣勝負を行なう機会をいただきました。渡航前の十分な時間が取れない中、1、2週間以内で3レベルの教案を作成し、何度も「ダメ出し」をされながらも忍耐強く書き直し、本番に備えられた参加学生は現地の担当教授陣や韓国人学習者からも絶賛されました。やはり、準備が大事だということを身をもって体験できたと思います。実習日程、実習概要については後述します。

国際交流基金の「大学連携日本語パートナーズプログラム」では2018年の雲南師範大学へ派遣（1名、10か月）した実績がありますが、今回は日本語教員養成課程受講者を対象に、公募により10名（人文学部8名、法学部1名、経営学部1名）をインドネシア・マラン市にある国立ブラウイジャヤ大学に派遣する計画が採択されました。このプログラムは、派遣対象地域が東アジアでは中国、台湾、フィリピンの3地域、東南アジアではインドネシア、カンボジア、シンガポール、タイ、ブルネイ、ベトナム、マレーシア、ミャンマー、ラオスの9地域となっており、大学間の学生の指導体制が整っていること、現地の日本語学習者と日本人学生の日本語を通じた交流、文化活動を行うことが方針として課せられています。今回の申請に際し、本学卒業生の小川ゆう紀さん（2015年文学研究科修士課程修了）が上記のインドネシア・ブラウイジャヤ大学の専任講師として活躍されていることから、受入れ大学となっていただきました。

国際交流基金関西国際センターでは、上記の大学連携日本語パートナーズプログラムに参加する大学で日本語教育を履修する大学生・院生のために「日本語教育現場体験」（2泊3日）が企画されましたが、2019年（2月）はインドネシアの大学教員、学生との交流で、本学から4名（科目等履修生1名を含む）が参加しました。この報告も含まれています。

1. 研修日程【2019年11月11日(月)～11月22日(金)】主要行事予定

- 11月11日(月) 夜10時頃 東横イン大田ホテル1階ロビーにてガイダンス実施
 11月12日(火)～22日(金) 大田大学校にて初級、中級、中上級の実習
 11月22日(金) 午後4時30分 大田大学国際交流院及び学科による慰労送別会
 11月23日(土)以降 帰国準備、日本帰国

2. 監督者・実習指導者・学生バディ

- 実習責任者・引率・実習指導：北海学園大学 中川かず子 教授
 実習責任者：大田大学国際言語学科日本語文化専攻主任教授 朴 喜南 教授
 科目担当指導： 同 黒木 了二助教授
 科目担当指導： 同 姜 蓮華助教授
 実習協力：大田大学校国際交流員 実習担当職員 金ナヨン 氏
 学生バディ：4名(日本語文化専攻及び他学科の学生)

3. 北海学園大日本語教育実習生7名(各自3回実習/初級1回・中級1回・中上級1回以上) 実習日程(実習回数、実習クラスのレベル・実習日・曜日・実習時間・担当指導教授、学生人数)(希望者は、最大5名まで全4回の実習が可能。)

- 越前 梨 ①中 11/12火1限・黒21 ②初 11/14木1限・姜41 ③上 11/22金1限・黒8
 ○嶋守咲妃 ①初 11/12火3限・姜41 ②中 11/15金4限・黒6 ③上 11/20水1限・黒6
 ○能戸麻紀 ①中 11/13水1限・黒6 ②初 11/14木2限・姜41 ③上 11/20水2限・黒6
 ○千葉朱里 ①中 11/13水2限・黒6 ②初 11/15金5限・黒20 ③中上 11/21木4限・姜27
 ○上野夕音 ①上 11/13水5限・黒8 ②初 11/18月2限・黒21 ③中 11/21木3限・姜27
 ○高橋莉奈 ①初 11/13水6限・黒20 ②中 11/18月3限・黒21 ③上 11/22金3限・姜15
 ○吉住一生 ①初 11/13水7限・黒20 ③中 11/18月4限・姜27 ③上 11/22金2限・黒8

☆交流会のためのフリートーキング自由会話時間 4時間確保

- 第一回【11/14・木・3～4限・姜】
 第二回【11/15・金・1～2限・黒木】

☆実習を失敗した人のためのリベンジ実習可能時間 5時間確保

- 第一回【11/19火・1限・黒(初～中)、1時間】
 第二回【11/20水・6～7限・黒(初～上)2時間】
 第三回【11/22金・4～5限・黒(中～上)、2時間】

国内日本語教室で実習を体験して 【日本語教育特別演習】

人文学部日本文化学科4年 本間 由乃

2019年4月から12月にかけて、札幌エルプラザで毎週金曜日に開かれている日本語教室ボランティア「たんぼぼ」で実習を行った。私が参加したのは初級一のクラスで、台湾、フランス、オーストラリア、カナダ、インドなど多様な国籍の学習者が学びに来ている。授業形式は主に教科書を中心としたもので、授業補佐（以下 TA）が例文を二回ほど読んだあと学習者に復唱させ、例文の応用や文中の空欄を埋める作業を TA とのペアワークを通して行っていた。毎週、授業を担当する先生（以下 T）は定型化された授業の流れとは別に、いかに学習者を巻き込み、尚且つわかりやすい授業にするための創意工夫を凝らしている。例えば、単語を教える際に使用するカード一つとってみても、Tによってはイラストや写真が使用されているものや、ローマ字表記になっているものなど違いがある。実際に TA として学習者と同じ目線で授業に参加することで、そういった工夫がいかに覚えやすく理解が深まりやすいのかにつながっているのかがわかった。なかでも印象的だった授業が二つある。

一つ目は料理の作り方を日本語で表現する回だ。その授業を担当した T は子供がおままごとで遊ぶときに使う、おもちゃのキッチンセットを持参していた。水道を使うと流水音が流れたり、コンロをつけると食材が焼ける音が流れたりする。料理を作るときの「焼く」、「炒める」、「煮る」という言葉の違いを説明するのに、文字だけが書かれたカードを見せジェスチャーで伝えるよりも、学習者自身も体を使って学習し、直感的に意味の違いを理解できる。おもちゃのキッチンセットはこの授業を行うに当たって非常に適した教材だといえるだろう。教科書のみではなく、母国の料理を学習者自身が説明するという課題を設定していたのも、TA や他の学習者とのコミュニケーションにつながり、雰囲気も良かった。

二つ目は日本語で道案内をする回だ。教室にある机を、間隔を空けて並べ、学校や公園といった場所のイラストが描かれたカードをそれぞれの場所に置き、町に見立てた。こちらも実際に体を使って道案内で使用する表現を覚えられるほか、学習者のスタート地点を変えることで多様な表現を使った練習ができるという利点もある。

しばらくこのように他の T の授業を見た経験や、日本語教育特別演習の中川先生とたんぼぼの方々にアドバイスをいただいたことから、文章や単語をただ繰り返すだけではなく、コミュニケーション能力をめざし文脈を重視するという、自分の授業に活かしたいポイントが明確になった。私が担当したのは「先週、旭川に行きました」というような過去形の部分である。まず現在と過去の表現の違いを理解してもらうために、カレンダーや絵カードを用いて、学習者に先週なにをしたかといった質問を行った。また、ペアワークのコミュニケーションを重点的に取り組んでもらえるよ

韓国大田大学での 日本語教育実習

人文学部英米文化学科3年 越前 梨

11月の2週間、私は韓国で日本語の教育実習をしてきました。今までの授業で50分の授業を1人で行ったことはなく、外国で日本語を教える経験はなかなか出来ないことでした。また、私は将来、韓国で日本語を教えたいと考えているため、この実習はとても貴重な経験となりました。

2週間の間で4コマの授業を担当しました。私の授業では今の日本を知ってもらいたいと思い、「ソロ活（一人で活動すること）」や「カスハラ（カスタマーハラスメント）」などといった現代の日本の文化にはどんなものが広まっているのか、また、どのような問題があるかなどの点に着目した題材を用いました。これらの授業では日本のニュース記事や動画を見たり、日本と韓国の文化を比較して話し合ったりしました。学生たちから「韓国ではこうする」「この部分は日本と似ている」など意見をたくさん発信してもらえました。

そのおかげで、私も韓国文化について学ぶことができ、授業をしながら学生たちと交流を深めることが出来ました。またこのように今回の実習が実りあるものにできたのは、私を含め7人の実習生がお互いの授業で協力してTAとしてサポートに回ったり、それぞれの授業後に反省会の時間を設けたり、お互いがより良い授業を作り上げようと切磋琢磨した結果だと思っています。

初めは50分の授業を1人で教えることに不安や緊張でいっぱいでしたが、交流会や授業を通して学生たちとの距離を縮められ、授業をしていくにつれて自分の出せる力を最大限出せるよう工夫する力も芽生え、教壇に立っていること自体を楽しんでいる自分がいることに気づきました。また、学生からも授業が終わった後に「楽しかった」という言葉をもらった時は、今回この実習に来て本当に良かったと思いました。

今回の経験を活かして、これからも日本語を教える活動に携わっていき、卒業後は日本語教員として学生から日本語や日本文化にたくさん興味を持ってもらえるような楽しい授業をしたいと思います。



写真上：初級クラスの授業を実習中

写真下：中上級クラスのグループ討論授業に参加して

韓国大田大学での 教育実習を終えて

人文学部英米文化学科 4年 嶋守 咲季

私は今回、2週間韓国の大田大学で教育実習に行ってきました。私は大学卒業後にタイの学校で日本語教師として働くことになっていますが、自分で教案を作成しそれを基に授業をするという経験がなかったため、少しでも授業をするということに慣れておくためにも参加を決めました。大学の講義内においてグループで模擬授業を行う機会はありましたが、複数人で行うこと、15分以内という短時間であったということで教育実習とは大きく異なっていました。ほぼ未経験の人にいきなり60分の授業を持つことはできるのかすごく不安でした。出国する前にかかなりの時間をかけ、また大学の教授にアドバイスをいただきながら担当する3つの授業の教案を作成しました。時間をかけて作ったので不安ではありましたがどうにかなるだろうとどこかで思っていました。いざ自分で作成した教案通りに授業を進めてみると、時間配分が悪かったり導入の内容や練習問題の工夫が足りていなかったり様々な点において実習先の先生にとっても丁寧に指導していただきました。自分の担当する授業がない日は他の実習生の授業を見学していました。私にとって他の実習生がどのように授業を進めるのかを見る時間はとても貴重だったと思います。自分では思いつかないような工夫があったり、自分に欠いている部分を見つけることができたり、残りの自分の担当する授業の教案を直して少しでも良い授業がしたいとモチベーションを上げることにもつながりました。3回の授業を終えて、どの授業も自分の納得いくようなものではありませんでしたが、実習先の先生にはすごく良くなったと褒めていただけたこと、また「自然体で授業できていて良かった」と言ってもらえたことがすごく嬉しかったです。今後日本語教師として働く大きな一歩になったように感じました。

2週間の教育実習を終えて、60分の授業を行うのにその何倍もの時間をかけて準備しないといけないということ、また他の人の授業を見て何かを得ようとしたり何か工夫したりしようとするなど自分の教案や授業に満足することなく、教師自身が常に学ぶ姿勢が必要だということを学びました。教師として生徒の前に立つということはすごく責任のある仕事だなと改めて感じました。2週間という短い時間ではありましたが、このように考えられるようになったのもこの教育実習に参加したからで、自分自身の成長につながったと思います。



協力学生と実習参加学生と一緒に撮影



上級クラスでグループ討論（教育実習生も韓国の学習者と討論に参加）

韓国大田大学での 教育実習を通して

人文学部英米文化学科3年 高橋 莉奈

私は、11月に2週間、韓国にある大田大学で2週間、日本語教師の教育実習をさせていただきました。元々、教育関連の職業に興味があり、日本語教師養成課程も受講していたので、実際の日本語の授業と教育に関心があったので今回参加しました。この2週間で、教師の厳しさや難しさを経験しました。まず、韓国で実習をさせていただく前に、初級、中級、中上級の50分授業の教案を作りました。教案自体が作成するのが初めてだったので、どのような授業構成にしたら50分の授業になるのかなど考えるのがとても苦労しました。PowerPointや配布プリントも作成し、1つの授業を作るのに多くの時間がかかることがわかりました。

韓国では、三回、実習で授業をさせていただきました。私が初めて授業をさせていただいたのは、初級のクラスで、誘う表現の授業をしました。しかし私は、50分間授業を行うことができず、半分ほどで私の考えた授業が終わってしまいました。50分間、授業ができなかったのは実習生のメンバーのうち私だけだったのでとても悔しかったです。授業内での時間配分の難しさを知りました。この悔しさから、私は自分が考えた教案を見直し、1から考えなおしました。その結果、次に行った中級のクラスの実習では、50分間授業をすることができました。また、最初はとても緊張しておりうまく言葉が出てこなかったり、顔がこわばっていましたが実習をするうちに徐々に慣れてきました。自分で授業をすること自体が不安でしたが、3回目の実習では授業を楽しむことができました。

他の実習生の授業を見学しましたが、それも勉強になりました。授業の構成が上手だったり、ロールプレーに工夫があって楽しい授業になっていたり、他の実習生の工夫が見られました。毎回実習生で、意見交換をしたことも参考になりました。人の意見を聞いたり、人のアドバイスやよいところを進んで取り入れるのがより良い授業を作っていくためには重要だとわかりました。教育実習生の担当の先生には、私の授業に対して多くのアドバイスをいただきました。また、教師一人一人の授業は違っていて自分らしく、自分のよいところを授業に入れることが大事だと教わりました。私は、笑顔がよく楽しそうに授業をしているところがよかったですとおっしゃってくださいだったので、そこをこれから自分の長所として様々な場面で生かしていこうと思いました。

今回の実習は、他の実習生に比べてできていない部分が多く落ち込むことや悩んだことが多かったです。しかし、自分のよいところを見つけて、少しずつよい日本語の授業ができるようにしようと前向きになれたよい機会でもありました。初めてのことでとても充実した実習でした。



中央左端が私です。



右から二人目が私です。

韓国大田大学での 日本語教育実習

人文学部日本文化学科3年 千葉 朱里

2019年11月11日から23日まで、韓国の大田大学で日本語教育実習をさせて頂きました。約2週間という短い時間ではありましたが、多くの人に協力して頂き、とても充実した時間を過ごすことができましたと思います。

私が実習で担当させて頂いたクラスは、初級（19名）、中級（6名）、中上級（27名）の3クラスです。授業を一人で行うことも、50分の授業を行うことも今回が初めてだったため、何にどれだけ時間をかけるか、どうしたら学生が興味をもってくれるかなど、出来るだけ細かく計画を立て、本番に臨みました。

このようにして私が行った最初の授業は、中級クラスの「オノマトペ」がテーマの授業です。3回目の中上級クラスも同様のテーマで授業を行いました。どちらのクラスでも細かなニュアンスを伝えることには苦勞し、改めて言葉を人に教えることの大変さを実感しました。特に、中上級クラスでは似た意味のオノマトペの例文や絵を示し、意味の違いを考えるという内容の授業を行ったのですが、学生によってははかなり難しく感じたようです。そのような学生には、他の実習生の力も借りつつ、一人一人丁寧に説明することを心掛けました。授業後は反省すべき点が多く少し落ち込みましたが、その分、学んだことも多くあった授業でした。

また、2回目の初級クラスでは、「～てください」をテーマに授業を行いました。内容は、「て形」を確認しながら「～てください」という表現を学び、最終的にこの表現を使って大田の道案内をする、というものです。私は韓国の学生の生活に興味があったため、大田の学生がよく遊びに行くという銀杏洞エリアの地図を用意し、ペアごとに決めた店までの道案内を話し合ってもらいました。私が「どうですか、できましたか?」と聞くと、分からないところを質問してくれたり、あるいは、完璧に道案内をしてくれたおまけに、店の説明までしてくれたり、という学生もいました。私は、授業において「分かりやすさ」も重要なことの一つだと思いますが、同時に、「生徒が興味をもてる授業であること」も大切なことだと考えています。ですから、あまり上手くいった授業とは言い難いですが、何より学生が楽しんで授業に参加してくれたことが本当に嬉しかったです。

以上が簡単ではありますが、実際に実習に行って感じたことです。初めは50分の授業を3回もできるだろうかと心配していましたが、実習を終えた今では、3回もチャンスがあったことは貴重な良い経験だったと思います。毎回の実習後に細かなアドバイスをくださった先生方、他の実習生

のみなさんの協力があったからこそ、1回目よりも2回目、2回目よりも3回目と授業をより良くしようと努力することができました。実習以外にも、交流会やちょっとした休み時間に大田大学の学生と触れ合い、充実した2週間を過ごすことができました。今回の実習に参加することができ、本当に良かったです。



中上級クラスの学習者と交流会（自由討論） 右から二番目が私です。

韓国大田大学での 日本語教育実習

人文学部日本文化学科3年 上野 汐音

私は11月11日～23日の間、韓国の大田大学で2週間の教育実習を行いました。実習内容は、初級・中級・上級のクラスで韓国の学生を相手に日本語の授業をするというものでした。最初の1週間は引率の中川先生が同行してくださり、残りの1週間は自分たちで行動しなければなりません。編入学で3年生から北海学園に入学した私は、日本語教育の勉強を始めてから数か月しか経っていなかったこともあり、そんな自分がいきなり50分の授業を3回もできるのだろうかとても不安な気持ちでした。しかし引率をしてくださった中川先生をはじめ大田大学で指導をくださった黒木先生や姜先生、バディの方達や授業でお世話になった大田大学の学生達のおかげで、とても有意義な時間を過ごし貴重な経験をすることができました。

韓国に行く前に3回分の授業の準備をしました。私にとって短い時間でそれぞれのレベルに合わせた50分の教材と教案を作るのは本当に大変でした。最初の授業では思うようにいかずなんとか50分乗り切ったという気持ちでした。自分たちの授業が終わった後に大田大学の黒木先生と姜先生が実習の指導をしてくださり、良かった点や改善点を細かく教えていただきました。良かった点や改善点だけではなく、実習生それぞれの性格や特徴を理解した上で、その人の強みになるような授業の進め方をアドバイスして頂いたことが本当に嬉しかったです。自分がこれからどのように授業を進めていけば上手いくのか、自分ではわからなかった自分の強みを知ることができたのが一番の収穫だと思います。黒木先生が4回目の授業をする機会をくださり、他の実習生と協力して教案や教材を作りました。回数を重ねるごとに日本語を教えることの楽しさややりがいを感じる事ができました。

大田大学では先生方をはじめバディの方や学生達にもとてもお世話になりました。授業が早く終わった日はバディの方がデパートや繁華街に連れて行ってくれたのでお土産を買ったり買い物を楽しむことができました。バディの方達とは先生方や実習生全員で何度かご飯に行き、そこでたくさん話をする事ができました。またバディの方達だけではなく、授業で仲良くなった学生もいました。先生方が交流会の時間を多く設けてくださったので、そこで趣味の話をしたり、日本の好きな映画やドラマの話で盛り上がりました。授業で何度も会う学生とはSNSを交換したりして、とても楽しい時間を過ごす事ができました。また私たちが行った時期にちょうど学術祭という行事があり、弁論大会や演劇、歌とダンスを見学しました。すべて日本語で行われていて、皆さんすごく日本語が上手だったので驚きました。学術祭のために何か月も前から練習をしていたと聞いたので、見る事ができてよかったです。

今回の大田大学での実習で初めて実際の日本語教育の現場に立つ事ができました。実際に授業

をしてみて日本語を教えることの大変さを実感しましたが、反省点や自分自身の課題も見つけることができました。渡韓する前は、日韓の関係があまり良好ではなかったことで不安な気持ちもありましたが、雨の日に傘を差さずに歩いていた私を韓国人の女性が駅まで傘に入れてくれるなど、大田大学の方達をはじめ韓国の方々はすごく優しくかったです。今回の実習で日本語教育について学ぶことができただけでなく、大田大学の学生達と有意義な時間を過ごすことができました。今回の実習の反省点を踏まえ今後は大学でより深く日本語教育を勉強し将来は日本語教師として活躍することが私の目標です。



中央右が私です。



右から2人目が私です。

韓国大田大学での研修を終えて

人文学部英米文化学科3年 吉住 一生

韓国での研修は私に予想していたよりも多くの収穫をもたらしました。現在、日韓関係が悪化する中で韓国に向かうことは家族を含め私の周りの多くの人々が反対していましたが、その反対を押し切り参加することになりました。研修に参加することを決めた春の間には日韓関係がここまで悪化することは私の勉強不足もあって予測できませんでした。そして、それでも行くことが決まった時私は韓国の人々が日本人に対していい対応はしないだろうという予想をしていましたが、それはいい意味で裏切られることになりました。現地の人々はとても友好的でそこには冷え込みを感じさせない雰囲気がありました。

大田大学での研修はかなり忙しく、そして私自身が日本語を教えるということに関していえばゼロ初級でありましたので、短い時間での試行錯誤の繰り返しでした。授業などやる前から失敗するとわかっているような状態で、3回の授業を完遂することができるのかもわからない不安が重くのしかかっていました。そういった背景もあり、私の授業へ最初はとても見てられないものでありました。ですが、最終的には現地の先生からも一定の評価をもらうことができましたので成長の実感がありました。また、同じく研修に参加していた方々の授業は私の授業を見直すうえでかなり参考になりました。しかしながらまだ改善すべき個所はありましたので次にこういった機会があるかどうかはわかりませんがそういったチャンスを頂けることがあれば生かしていきたいと思います。

大田大学の学生とも接する機会が多くありました。彼らは日本語専攻であることも相まってかなり友好的な方が多かった印象があります。そして、ヨーロッパの人々よりも短い時間で、かなり上手になっている人が多いということに改めて感心しました。そして彼らから聞いたことの多くが日本の文化が多く韓国に伝わってそして流行していること何より最近の関係悪化をととても懸念していることを教えてもらえました。彼らの多くが大学卒業後には日本語を生かした仕事につきたいと語っていましたが、その語り口は不安が混じっており、自分の将来に対する不安というものが見えたことは印象に残っています。

今回の研修で一番私を驚かせたのは政治的に保守派な私に韓国にもう一度行きたいと、韓国語も学んでみたいと感じさせたことです。

最後になりましたが、この場を借りてこのような研修を企画してくださった中川先生、現地で指導してくださった黒木先生、姜先生、さらに研修をサポートしてくださった多くの方々に感謝を申し上げます。



実習に参加した学生、韓国人協力学生と共に（前列右側が私です）

韓国大田大学での 日本語教育実習を終えて

人文学部日本文化学科4年 能戸 麻紀

2019年11月11日から2週間に渡り、日本語教育に関する実習に臨みました。私は日本語教員養成課程を履修しており、基本的な日本語教育に関する知識を学んだり、講義内で模擬授業を行ったりしてこれまでの大学生活で学んできました。今回の実習は、その集大成とも言えるものでありました。日本語を教えるボランティア活動を続けてきたこともあり、日本語教師という仕事に大変興味を持っています。実習に行くまでは、初めての海外渡航や実際の大学での授業を受け持つという不安と、現地での様々な出会いが楽しみだという気持ちで半々でした。経験が少しだけある分、リードできればという気持ちもありましたが、現地に着き、実際に授業が始まりその気持ちは消えていきました。

韓国に到着して、息をつく暇もなく実習は始まりました。授業の見学など学習の場もあることを期待していましたが、今回それはほとんど叶いませんでした。次々に学生の授業が進んでいき、自分も事前に作成した教案や教材を用いて授業を行いました。他の学生の授業を見ていて焦りを感じることもありました。自分の準備は全く足りていないのではないか、これでは全く授業にならないのではないか、と色々と悩みました。実習の中盤までは劣等感に苛まれることばかりだったように思います。実際に初級の授業がうまくいかず、担当教員の方々からの厳しいコメントが胸に刺さり、モチベーションを取り戻すまでに時間がかかりました。



日本語でのスピーチや演劇、歌やダンスを見ました。

途中からは、だいたい気持ちが吹っ切れて、自分には自分の、他の人には他の人の欠点や長所がそれぞれあるのだと思えるようになりました。他の人の良いところを見つけたらそれをうまく吸収していこうと考える余裕が生まれたのです。これはいたって単純なことのようで、実習中の張り詰めた精神の中で切り替えていくことは難しいことでした。

苦しいことばかりでもありませんでした。韓国の文化に

触れたり、皆で美味しい食事をとったり、韓国の人々と交流したりしたことは本当に自分の心の癒しになりました。辛いものが多くて、食べ物には少し苦労しましたが、安くてたくさんのが食べられる喜びを感じました。バスや地下鉄などを利用して大学に毎日向かいましたが、日本とは全く雰囲気が異なりました。まず、日本のように列に並ぶことはほとんどありません。バスや地下鉄が到着したら、一斉に人が集まって乗り込みます。車内でも関係なく大きな声で電話をかける姿をよく見かけました。コンビニの店員さんは、お客さんがレジにこない間は普通にスマートフォンを使用していました。スーパーのレジにはそれぞれ椅子があり、座って接客することが可能でした。

ほんの些細な違いかもしれませんが、私は韓国のこの雰囲気がとても好きになりました。日本にいるときちんとしすぎていて、自分は知らず知らずのうちに生きにくさを感じていたのかもしれませんが、もちろん、韓国には日本より厳格な部分もありますが、基本的にはフレンドリーだと感じましたし、いい意味で大らかであると思いました。

このことを大学の日本人の教授にお話ししたところ、自分にとってとても有益な言葉をいただくことができました。教授も、日本にいた頃は社会に適合できない部分を感じ、苦しんでいたようです。でも韓国に来てから、それがなくなったのだそうです。人にはそれぞれ、自分に合った居場所というものがあり、それを見つけた時に、ストレスなく自分らしさや自分の能力を発揮することができるのかもしれません。実習において、日本語教育に関する知識や授業のノウハウだけでなく、自分がこれからどんな道を選んで歩んで行くべきなのか、ということまでもアドバイスを頂けたことは幸福なことでした。

辛く苦しい期間でもありながら、心からの楽しさも味わうことができた、貴重な時間でした。必ず今後の人生において大きな意味をもつ2週間であったと確信しています。



学生との交流会の様子、右から2人目が私です。

インドネシアでの文化交流

～日本語パートナーズを通じた体験～

法学部政治学科3年 佐藤 ゆき

私は法学部政治学科に所属していながら日本語教師になりたいという夢のために日本語パートナーズに参加した。

インドネシアは車よりもバイクが圧倒的に多く、空港から現地への移動の際にそのことを痛感した。また道路の整備がされていない部分が多いことや、ほとんどの人がバイクで移動するため歩行者用信号があつてないようなものとなつていて出歩く際はとても注意が必要だった。2週間お世話になったブラウイジャヤ大学の日本語関連の学科は新しく2002年に短期学部、2007年に4年制の日本文学科となったということもあり、私たち学生が1コマ丸々もらい授業をさせてもらうことがあつたりなど授業体系が柔軟で常に学生のことを考え新しい取り組みが行われていた。

1番驚いたのは現地学生の日本語浸透率だ。入学が9月ということもあり新入生の授業にも参加させてもらったが来日しても困らない程度の会話ができる学生が大半だった。学年があがり3年生ともなると日本のアニメの話や音楽、映画の話などたわいもない日常会話ができる。授業に関して3年生の授業で出てくる敬語表現などは日本人でも難しく、クイズ番組の難関問題で出てくるようなレベルだった。

次にインドネシアでの生活についてふれておこう。起床は6時。これはインドネシアの約7割の人がイスラム教であるのと関係している。朝6時からお祈りがありお祈りを知らせる音楽が流れるのだ。この時間から町全体が動き始めている。そして朝食を食べ学校に行く。日本人は1日3食が基本だが現地学生は1日2食が基本と聞いた。朝のお祈りをして1コマ目の授業を終えてから朝兼お昼のごはんをたべ、その後15時か16時にご飯を食べて1日の食事を終えるのだそうだ。実家にいるときは3食でてきたが寮や一人暮らしをしている学生は朝食べない人がほとんど。ちなみに現地学生の寮は食事つきが少なく大体学食などでごはんを食べる。そして学生の半数以上が寮生活をしていたり一人暮らしをしていたりする。泊まっていたホテルの横にあるモールは大きくきちんとした両替所があつたりレストランが入っていたりと充実していたが現地学生からするとそこでの食事は高めだと言われた。1食300円から500円程度だったため私達日本人は1食を外食するとしたら安いほうだと感じたが学食でごはんを食べると1食約60円。物価の違いを感じた。

また気温の変化に困惑した。朝は薄手のカーディガンなどが欲しくなるくらい肌寒いが日中になると太陽の日差しが暑く半袖でも暑い。日本人がそう感じる気候だがその中でイスラム教の女性は肌を見せないようにヒジャブを身にまとい、肌の露出を極力していない。他宗教の学生でもイスラム教の学生に配慮してなのか膝上のスカートや半袖を着ている人がいなかった。イスラム教の学生

に肌を露出している人のことをどう思うか尋ねると「露出を控えたほうが良いと強制する気はないし色々な人がいると思うけどやっぱりちょっと距離を置いちゃうかな」と答えてくれた。私はこれからムスリム圏に行く、またはムスリム圏の方々がいる場に赴く際は少しの配慮として露出を控えたほうが良いということを学んだ。

私は今後も知り合った学生たちと仲良くしていきたいと思い自分自身は彼らにどうしたら寄り添えるか考えた。ブラウイジャヤ大学の学生は多くが日本に一度は行きたい、日本で働きたいと考えている反面日本に不安を抱えている学生も多い。だから現地学生と連絡先を交換し彼らの日本への疑問解消を手伝い、より日本に来やすいようにサポートしていきたいと思う。

今後もしブラウイジャヤ大学に行く、またインドネシアに行く人は以下3つのことを参考にしてほしい。

- ①日本ではあまり使われていないが「Grab」というアプリをインストール
→現地ではバイク移動が主なため、このアプリはバイクやタクシーをすぐに呼べるもの
- ②現地のほうがレートが良いため日本で両替するのはホテルまでの交通費のみが良い
→現地のモールにあるちゃんとした両替所だと日本よりレートが良いため
- ③ポケット wifi を持っていくべき
→英語が通じずインドネシア語の翻訳が必要な時が多く何かとスマホを使う場面が多い

インドネシアでの2週間の経験はとても刺激的で初めての体験がとても多かった。郷に入るとは郷に従えという言葉があるが日本は無宗教が多いからこそ他宗教の人に配慮することや食べ方の作法など日本にいるときは気にしなかったものに気を配るという経験は自分とは価値観や考え方の違う人を理解するという自分自身の成長につながった。

今回一緒にいった仲間とブラウイジャヤ大学の学生の皆さん、先生方に心より感謝します。多くのサポートをありがとうございました。



授業後、学生の皆さんと

インドネシア ブラウイジャヤ大学での 日本語教育と文化交流

経営学部経営学科3年 高本 寛也

経営学部で日本語教員養成課程を受講しているのは、学年で一人だけ。少し肩身の狭い思いを感じながら受講していた中川先生の授業で、国際交流基金大学連携日本語パートナーズのお話が舞い込んだ時、「これだ」と確信しました。

元々日本語教員に興味を持ったのは、高校時代に2週間短期留学したニュージーランドで日本語教育の現場を見せて頂いたのがきっかけでした。日本語を通して文化や慣習など新しいことを学ぶ喜びと期待から、キラキラと目を大きく輝かせている学生の姿が忘れることができなかつたのです。「このキラキラを届けられる先生になろう」と決心しました。

しかし、日本語教員を一生の職業とすることには非常に躊躇いがあり、そんなもやもやを漠然と抱えているときに今回の機会を頂くことができました。

そうして取り組んだ今回の日本語パートナーズで面白いと思ったことが2つあります。

まず一つに宗教についてです。日本の宗教は仏教ですが厚い信仰はなくほとんど無宗教に近いと感じます。インドネシアは主としてイスラム教ですが、キリスト教やヒンドゥー教を信仰する人も少なくありません。現地のリアルな宗教についての考えをどうしても聞きたかったのですが、正直、学生に宗教のことを聞くのは勇気がいりました。宗教が人間にもたらす力は計り知れないもので、歴史的にも戦争や差別などが起きているテーマと考えていました。ですが実際に意見を聞いてみると、それぞれがそれぞれの宗教を尊重して、とても理解を示していました。町を見てもモスクと教会、寺院が共存していたり、プライベートはもちろん仕事中にイスラム教の「お祈りの時間」が来てもばつが悪い顔をする人は誰もいません。思想や習慣に違いがあることを認め、お互いに許



容し合うのが「当たり前」として存在しているのはとても素晴らしく感じました。人と異なること、迷惑をかけることを極度に嫌うわたしたちにとっては考えさせられることでした。ちなみに各宗教の女の子に「日本人の彼氏とかどう？」と聞いたら、全員ゆっくりと目を逸らして物凄く微妙そうな顔をされました。心

に小さな傷ができました。

もう一つは手食の文化です。滞在中一度だけ、ご飯を手で食べることにしてみました。初めはもちろん抵抗はあったものの、すぐに慣れ、これがえも言われぬ感覚でとても素晴らしく感じました。「指先で味わう」という手食独特の表現はまさにその通りで、温度や質感をダイレクトに感じながら口に運ぶのは不思議で感動を覚えます。本能的な行為だからか、はたまた人間のルーツによるものか、とちょっと考え過ぎかもしれませんがしかし、間違いなくどこか忘れていた「何か」を感じ取ることができたような気がします。不潔？ 野蛮？ フライドチキンは手で食べるくせに？



今回の日本語パートナーズでの派遣では文化的思考差異をとっても強く学び取ることができました。インドネシアの学生に日本語を教えるつもりが、インドネシアのことを教えてもらってばかりになったような気がします。辛く大変な派遣かと思っていましたが、本当に楽しく実りある2週間でした。どちらかと言えば今回の日本語パートナーズに関する、中川先生の突発的な変更や追加要求の方がよっぽど大変でしたね。正直、将来日本語教員になるかと言われてればまだ躊躇うと思います。しかしこの経験を武器に、一つの選択肢として考えながら進んでいきたいと思っています。

最後に、経営学部である私を今回の日本語パートナーズに派遣・ご指導いただいた中川先生、ブラウイジャヤ大学の教授の皆様、一緒に行った仲間、そして授業をサボって独り山に登ることを許してくれた小川先生、本当にありがとうございました。一生の思い出と素晴らしい経験になりました。



インドネシアで 日本語を教えた経験

人文学部英米文化学科3年 越前 梨

私は2019年8月26日から9月8日までの2週間程度、日本語パートナーズとしてインドネシアのマランにあるブラウイジャヤ大学で日本語を教えました。私は日本語教員課程を履修しており、日本語教授法という授業で模擬授業を1度だけ経験したことはありました。ですが、実際の現場で日本語を教えたことは一度もありませんでした。そのため、異国の地で日本を教えるのはどのようなものなのか、多少不安もありました。今回の日本語パートナーズの派遣では、授業のアシスタントとして学生のサポートをしたり、会話の授業では日本文化に関するプレゼンテーションをしたりしました。

まず、一番に感じたのは学生の日本語学習に対する熱意が大きいことです。会話練習などの発声も声が大きくはきはきしており、話そうという意欲を感じました。そして、私のチームが会話の授業の中で、札幌の観光スポットやグルメについてプレゼンテーションで紹介したときもそれは表れていました。スライドをめくる度、学生たちのリアクションがとても良く、プレゼンテーションが終わると学生たちが次から次へとたくさん質問をしてくれました。まだ、初級の学生も自分持っているボキャブラリーを最大限に駆使して私たちに伝えようとする姿勢が見えました。そのおかげで、不安や緊張はすべて飛んでいきました。また、授業が終わった後も学生たちが私たちに話しかけてくれて、マランにあるおいしいご飯のお店を教えてもらったり、インドネシアの観光スポットなどについても教えてもらったりしました。

そんなフレンドリーで、活発な学生たちと授業を受けて、とても充実した毎日を送り、2週間はとても短い時間を感じました。そして、インドネシアと日本について話すことで、私も日本語教員に対する意欲がより刺激されました。この日本語パートナーズの派遣が学生たちにとっても日本語や日本に対する興味関心をよりもってもらえる機会となっていればと思います。



写真上：教室でブラウイジャヤ大学学生と日本語パートナーズ参加者
写真下：市内のレストランで協力学生と日本人学生、引率教員

インドネシア・ ブラウイジャヤ大学での 文化交流

人文学部英米文化学科3年 高橋 莉奈

私は、夏休みの内の2週間の期間、インドネシアにあるブラウイジャヤ大学に日本語パートナーズとして参加しました。大学で、日本語教育養成課程を履修しており、教育関連に関心があったことと、異文化理解に興味があったので今回参加しようと思い応募しました。短い時間でしたが、大学生活の中でもとても貴重な経験となりました。インドネシアの大学では、日本語の授業の見学や、ディスカッションに参加して、インドネシアの学生と意見交換をしたりしました。私が、一番驚いたことは、難しい文法や、漢字も学習していることでした。私が参加させていただいたのは、文法と会話の授業がほとんどでしたが、文法は最初に新しい文法を学習して、そのあとその文法を使って自分で例文を作るという授業形態でした。文法の学習中、難しい単語はわかりやすく表現したり、インドネシアで例えたり、日本の文化のについても話しており、日本語の授業を見学するのは初めてだったので、先生方の授業はとても面白く参考になりました。学生のほとんどが、授業に対して反応が良く、授業に対して積極的な様子でした。復唱の時も、声をしっかり出していて良いなと思いました。ディスカッションの授業では、女性の働き方についてグループで話しましたが、日本とインドネシアでの女性の働き方の違いだけではなく、インドネシアの就職や学生のアルバイトなどについても話すことができ、私も知らなかったことが理解できました。日本で将来働きたいという学生も多かったです。私は、インドネシアの学生と話して、学生の日本語能力がとても高いと思いました。3年生、4年生になると多くの学生が流暢に上手に日本語を話せるので皆勉強しています。私自身も大学では英語を専攻していて、語学の学習歴は長いですが、海外の人と話すときは言葉につまることも多いので、学生のように積極的にまず話してみようと思いました。

授業外でも、学生が買い物や夜ご飯に連れて行ってくれたり、休日には有名な観光地や海と一緒にいったりと学生と交流ができ、とても良い思い出になりました。帰国の日には、空港まで一緒に来てくれ最後までとても優しくしていただきました。空港に向かう途中のバスの中で楽しく話して、最後まで楽しく過ごせたのがとても印象に残っています。インドネシアに行く前は少し不安でしたが、現地の先生や学生の協力のおかげでとても楽しく、あっという間の2週間でした。日本語教師について知るだけでなく、異文化交流、自分の言語学習についても改めて考えることができとても良い機会でした。インドネシアは日本語学習者が多い国だと肌で感じる事ができたので、今後、日本とインドネシアの交流がより増えれば良いと思いました。また、インドネシアについてあまり知らない日本人も多いと思うので、インドネシアについてもっと知っていかなければならないと思いました。



(写真上・下) 協力学生と日本人学生との交流



インドネシアでの文化交流

～ブラウィジャヤ大学での体験～

人文学部日本文化学科3年 千葉 峰弘

1 ブラウィジャヤ大学での文化紹介

私たちは8月26日から9月7日までの日本語パートナーズプログラムでインドネシアのブラウィジャヤ大学（以下BU）に行ってきました。BUはインドネシアの国立の大学で人文学部日本文化学科があり、日本語を専門的に学んでいる非常に優秀な学生が多い大学でした。他にもたくさんの学部があり国立の大学にふさわしいと感じました。

BUにいった目的はまず日本文化の紹介で授業の中にお邪魔してプレゼンテーションをしました。プレゼンをした後、引率して下さった中川先生に怒られてしまいました。私は普段から外国の方と接触する機会があまりなく、プレゼンをする際に日本語がまだ慣れていない初級や中級の学生に普段日本人と接している状態で早口にしゃべってしまいました。加えて私が使っている語彙はとても難しいものであるとの指摘もされました。

このことから相手の目線に立ってものを考える大切さが改めて理解できました。それまで授業などを通して「やさしい日本語」というものはなんとなく理解したつもりでいました。しかし、実際に現場に立ってみると「やさしい日本語」というものは自分が思っている以上にできていないことがわかりました。

「やさしい日本語」とは、簡単な語彙でありなおかつ平仮名を使用した日本語です。これからの時代「やさしい日本語」は必ず必要になります。理由として挙げられるのは、日本に滞在し生活する外国人労働者ないしは技能実習生の数が年々増えているからです。

2 BUでの日常

一方で授業以外では、チューターの学生たちが本当に仲良くしてくれて、ほぼ毎日楽しく過ごしました。8月30日に、独立記念のお祭りがあり骨董市が開かれていました。植民地時代にオランダ人によって支配されていて、そのときに持ち込まれた骨董品や建物が現在でも残っていて非常に歴史の勉強になると同時に当時の文化を学ぶことができました。

インドネシア人のほとんどがイスラム教徒で



あり、独立と同時にキリスト教の教えも廃れてしい建物も残っていないと思いましたが、キリスト教の教会が現存しており信仰している人物も少なからずいるそうです。

またその日に、ラジオ番組が生中継をしていてインドネシアの友人に通訳をお願いして、私自身が飛び入り参加をしました。インドネシア語はまだ勉強したことがなく、言っていることが分かりませんが、友人が通訳してくれたおかげで難なくその場を楽しめました。通訳してくれた友人がものすごい日本語に勉強熱心であり、自分も学ばなければならないと思います。

次の日の31日は、海に連れて行ってくれました。海に行くまでの道のりは険しい山と谷を車で越えて数時間かかり、道路はあまり整備されておらず車の車体が何度も上下しながら向かいました。海は本当に綺麗で透明に透き通っていました。

海に行く前に現地の学生に「緑色の服は着ていくな」と言われて、「どうして？」と尋ねたらインドネシアの古い言い伝えで、「緑色の服の服を着て海に行くとニャイロロと言う海の女王がひきずりこむのだ」というのです。おもしろい民間伝説も残っていてイスラム教徒の教えのほかにもあるのだなと思いました。インドネシアはほかにもお化けや日本の言うところの妖怪の文化もまた盛んであるそうです。

3 プログラムを終えてのこれから

今現在来日している外国人の数は増えています。その中でも技能実習生の問題は日頃からよくニュースで見かけますが、目にするのは良くないものばかりです。それは低賃金で人を雇い、環境が悪すぎるが故に失踪してしまうなどと言うことです。

実は日本の農業や漁業を現在支えているのは実習生です。インドネシアも技能実習生を何人も送り出している国の一つで、インドネシアは海洋国であるため漁業も盛んな国で、漁業を学びに来る実習生も多いです。BUの日本語を学習する学生達は本当に優秀な人ばかりであるため、彼らが環境の悪いところに行かないことを切に願うばかりです。

これから、たくさんの外国人労働者は増えることが予想される中で日本語教育ないしは日本語教師が必要となる場もまた増えていきます。私自身、もしいざという時に彼らをサポート出来るようになりたいと思います。



インドネシア・ ブラウイジャヤ大学での 文化交流

人文学部日本文化学科3年 千葉 朱里

2019年8月26日から9月8日まで、インドネシアのブラウイジャヤ大学で大学連携日本語パートナーズのプログラムに参加させて頂きました。

このようなプログラムに参加するのは今回が初めてだったため初めは緊張していましたが、ブラウイジャヤ大学の皆さんは温かく歓迎してくださり、素晴らしい体験ができたと思っています。

プログラムの具体的な内容としては、1日に平均1~2つの日本語の授業に参加することがメインでした。参加した授業の無いような、会話、文法、漢字、ディスカッション、通訳翻訳と様々で、学年も1~4年生まで全ての学年の授業に参加しました。それぞれレベルの違う学生と触れ合えたことは、とても良い体験だったと思います。私たちは、このような授業で主に、日本文化の紹介、授業の見学、そして少しではありますが授業のアシスタント（ある文法項目の例文をつくる、文章を音読する、教室内の見回り等）を行いました。

このような中、私は気が付いたことがあります。それは、私が思っていた以上に、学生たちは日本に強い関心を持ち、日本について様々なことを知っているのだということです。もちろん、彼らは人文学部日本文学科で日本語を学んでいる学生なので、それは当たり前のことかもしれません。しかし、今回のプログラムでインドネシアを訪れることになり、ようやく少しインドネシアについて知った私とのギャップは大きなものでした。このことには少し驚き、私自身の無知を反省したりもしましたが、一方で、彼らが私に日本について知っていることを話したり、熱心に日本語を学んだりしている姿を見られたことは純粋に嬉しかったです。

また、授業の時間以外も、多くの時間をブラウイジャヤ大学の学生と過ごしました。一緒にランチをしたり、放課後に大学の近くにあるショッピングモールを案内してもらったり、休日には海にも連れて行ってくれました。先ほど述べた通り、私がインドネシアについて知っていたことは少なく、学生との会話の中で様々なことを教えてもらいました。同時に、私からも日本の社会についてであったり、会話の中の自然な日本語を教えたりと、お互いに有意義な時間になったのではないかと思います。

今回のプログラムでは様々な人と知り合い、日本に帰国した今でも、SNSで連絡を取り合うことがあります。これからもこのつながりを大切に、少しではありますが彼らの日本語学習の手助けができれば良いと思っています。

最後になりますが、今回のプログラムは、私とブラウイジャヤ大学の学生にとってお互いのこと

をよく知る、とても良い機会になりました。また、私にとっては、インドネシアや日本語教育について興味をもつ良いきっかけにもなりました。今回のプログラムに参加することができ、本当に良かったです。



ブラウイジャヤ大学人文学部の日本語クラス（上級）「自由討論」授業で

インドネシアでの文化交流

～パートナーズを通じた体験

人文学部日本文化学科3年 中村ちひろ

8月26日～9月8日までの2週間の日程で、「国際交流基金大学連携日本語パートナーズ」としてインドネシア・マラン市のブラウイジャヤ大学にて研修をさせていただきました。

この「日本語パートナーズ」としての私たちの役割は、基本的にはTAとして現地の先生方のクラスに入り、必要に応じてサポートをすることが主でした。具体的には、指定された範囲の語彙で例文を作る、教科書のモデル会話を読む、といった仕事が多く、その他状況に応じて適宜教室を回って学生の質問に答えるなどの作業がメインでした。現地の先生方の実際の授業を生で見られ、僅かながらもお手伝いすることができたのは、私にとって貴重な経験でとても勉強になりました。当然ながら教え方や言葉遣い一つ取っても千差万別で、色々な先生方のやり方を自分なりに比較することができたのも良い経験でした。

日本語を学び始めるきっかけとしては、日本の伝統文化やあるいは漫画・アニメといったポップカルチャーに感化されて日本語を学び始めたという学習者も多い一方、現地の先生や学生たちに聞いた話によると、「日本語を学んで、将来日本で就職する」ことが一つのモチベーションとして根強いようで、そうした意味でも現地での日本語教育の需要が高まっていることを肌で体感できる貴重な経験でした。

研修中の期間は、主にブラウイジャヤ大学の国際クラスに在籍する学生のみなさんとの交流が多く、普段の日常生活の面でも何かとお世話になりましたが、みなさんがとても親切で、色々とお気遣いをしてくれたことが印象深いです。特に滞在して最初の週末は全員で海に行く計画を立てて、事前にすべての用意してくれていました。わざわざ車を手配して連れて行ってもらったインドネシアの海はとても美しく、おかげで素敵な思い出ができました。彼ら以外にも、私たちが参加した授業で知り合って声をかけてくれた学生さんがたくさんいらっしゃって、本当に好意的に接してくださっていることがとても嬉しく、ありがたいことだと感じました。授業が終わった後に学生さんが大勢やってきてくれ、SNSの画面を手に「アカウントを教えてください！」と声をかけてもらって嬉しい反面、その勢いのすごさに尻込みしてしまいたじろいでもありましたが、自分のような者でもこんなに求められることがあるのかと純粋に感動しました。

研修最終日には、国際クラスのみなさんをはじめ、滞在中に仲良くしてくれた学生さんたちがそれぞれにお土産を持ってきてくれていたことも驚きの一つです。まさかこんなにもたくさんの学生さんが用意してくださっているとは予想だにしておらず、中には日本語の手書きのメッセージカードが入っていたりして、非常に心温まるものでした。頂いたお土産が予想より遥かに多く、帰りの

手荷物がいっぱいになったことは私にとって嬉しい誤算です。

この研修の2週間は、インドネシアのみなさんの心遣いに最後までお世話になりっぱなしでした。学生さんと先生方をはじめとするみなさんにして頂いたたくさんの心遣いに、自分がどれほどお返しできているか、それに見合う働きが出来たかどうか些か不安ですが、滞在中は自分にできることをやりきれよう努めたつもりです。もちろん至らない点も数多く、途中、先生方の求めに上手く応じられなかった場面や、こちら側の実力不足のために依頼をお断りせざるを得ないこともありました。そのことについては大変申し訳なく思います。そのような状況でもこうして受け入れてくださり、勉強の場を設けてくださったことに感謝いたします。

いつか日本語教員として自分が教壇に立つことがあれば、この「日本語パートナーズ」での経験を活かしていければと思っております。その目標が達成できるよう、これからも邁進したいと思います。貴重な経験を積ませて頂き、ありがとうございました。



上：引率の中川先生帰国前日に撮った集合写真。
左：最終日に頂いたお土産のTシャツを着て撮った記念の1枚。

日本語パートナーズ

—ブラウィジャヤ大学での交流

人文学部日本文化学科3年 三浦 夕奈

私は2019年8月下旬から2週間ほど日本語パートナーズへ参加し、インドネシアのブラウィジャヤ大学で日本語教育の現場を実際に見て学ぶという貴重な経験をさせていただきました。大学では、授業の見学や補助、インドネシア学生とのディスカッション、日本文化に関するプレゼンテーションや文化交流などをやりました。

参加した授業は、「文法」「会話」「漢字」「MJM」（現代日本社会）です。学年は様々で、1年生から4年生まで幅広く関わることができました。日本の大学との違いで、学費によって授業の設備も変わってくるようで、インドネシアの学生でも日本語のレベルも初級から上級までその違いを明確に感じました。特にそれを感じたのは、授業内でやらせていただいた日本文化に関するプレゼンテーションです。3年生やチューターを請け負ってくれた学生たちは内容をある程度理解し、質問も積極的にしてくれました。しかし、1年生はまだ入学したばかりということもあり、プレゼンテーションの内容の理解が難しかったり、質問がしづらかったりという感じが見受けられ、まだ入学したばかりということ配慮してプレゼンテーションができなかったこと、質問の難しさに対応できなかったことが大きな課題となりました。

また、授業に参加していて感じたのは「学生は答えを出すことだけが目的ではない」と言うことです。漢字や文法、会話の授業では課題や問題を解くことが多くあったが、その答えが正解してい



たととしても、疑問が残っていたり納得していなかったりすると学生はどんどん質問してくれました。日本の学校だと積極的に質問する人は多くないため、質問されることが嬉しく、なるべく学生たちに日本語を伝えられればと思い、私たちが普段どのようにその日本語を使っているのか振り返りながら理解してもらえよう努めました。

授業以外でもインドネシアの学

生と交流する時間がほとんどでした。どの人も積極的に声をかけてご飯や観光地に連れて行ってくれて、今回の日本語パートナーズでは日本語教育の現場だけでなくインドネシアの文化を理解する良い機会となりました。アンティーク祭りに行った時には、独立記念のお祭りという背景が分かりました。バトゥに行った時にはインドネシアの伝統的な服を実際に着る体験もしました。これらは、インドネシアに来ないと知らなかったことだし体験できないことです。日本語教員は現地の文化の違いや宗教などを理解しなければならないというのは授業で分かっていたことですが、現地でその文化に触れることが、文化の違いに対する一番の理解だと思いました。

2週間ほどの短い期間で、日本語教員の現場を体験したといっても本当に一部分でしかありません。ですが、この経験は私の日本語教員養成課程への姿勢を変えるきっかけにもなりインドネシアで付けた知識や力は一生ものです。金銭的な意味で国際交流基金からの支援もあるので、日本語教員を目指す人は日本語パートナーズの存在を知ってぜひ参加してほしいと思いました。



アンティーク祭りで出会ったラジオ局の方々



Batu でインドネシアの伝統的な服を体験

日本語パートナーズを 通して得た経験

人文学部英米文化学科 4年 嶋守 咲季

私は国際交流基金の大学連携日本語パートナーズを通して、約2週間の間インドネシアのマラン市にあるブラウイジャヤ大学で文化交流をさせていただきました。今回私がこのプログラムに参加した理由は、大学卒業後に海外で日本語教師として働くことが決まっていたので、海外ではどのように日本語教育が行われているのかを実際に見てみたいと思ったからでした。日本語学科ということではありましたが、想像していたよりも多くの学生が日本語を学んでいることにとても驚きました。

ブラウイジャヤ大学では2週間の間で様々な授業を見学させていただきました。文法・会話・ディスカッション・ビジネスマナー等、学年別にどのような学習をしているのかを海外で働く前に自分の目で見るのができたのはすごく貴重な経験でした。今回は実習ではなかったため授業を見学することしかできませんでしたが、ディスカッションの授業には学生としてインドネシアの学生と一緒に参加することができました。その中で特に印象的だったのが「インドネシアと日本の女性の働き方」について話し合ったことでした。インドネシアと日本では女性の働き方が大きく異なりました。インドネシアでは日本と違い産休や育休が取りやすく子供を産むために仕事を辞めるといふ選択肢がないというのには驚きました。日本ではどうして女性は管理職に就きにくいのかという質問を受けましたが、曖昧なことしか答えることが出来ませんでした。また、女性は医学部に入れないのはなぜかと聞かれ、そんなことはないと言ったところ、医学部の入試で性別を理由に不正に不合格にさせる等の操作が行われていた問題についてインドネシアの学生から指摘を受けました。そのニュースは私も知っていましたが海外でも問題になっていることに驚くと同時に日本人として恥ずかしくなりました。「産休や育休で休んでいる間は他の人がカバーすればいい」という考えに納得するしかありませんでした。ある学生は「将来的には日本で働きたいけど、外国人で女性だと二重に大変そう」と言っていて返す言葉がありませんでした。早急に改善できるような対策ができるのを願うばかりです。

2週間という短い間ではありましたが、インドネシアと日本の文化の違いを自分の肌で感じ取れたことは本当に貴重でした。パートナーズのプログラムを通さなければインドネシアに行くという機会もなかなかできないことなので参加できて良かったと思っています。またチューターの学生のみなさんには感謝しかありません。インドネシアに滞在している間、様々な場所に連れていってもらったり食事を一緒にしたりなど、たくさんの時間を共有することができたおかげで今でも連絡を取り合うなど良好な交友関係を築くことができました。今年の3月から北海道にインターンで半年ほど働きにくる学生もいるので再会するのがとても楽しみです。



市内のレストランで参加者、引率教員、協力学生の皆さんと



日本語パートナーズ参加者と学生さん達と（前列右端が私です）

日本語パートナーズ・ インドネシアでの交流を通して

人文学部日本文化学科4年 山本 将輝

8月26日から9月8日にかけてインドネシアのマランにあるブラウイジャヤ大学に行き現地の学生との交流や日本語の授業を見学し、実際の日本語教育を学びに行ってきた。今回インドネシアでの経験を振り返り学んだことをまとめてみたい。

まず日本語の授業を見て実際に学んだことだが、学習者は中級や上級など学習状況によってクラス分けをされていた、そのクラス内ではレベルに差があるということを知った。実際中級のクラスでも上級レベルに日本語を操る学習者がいた。レベルに差があることの背景にインドネシアの高校では第二外国語に日本があり、高校ですでに日本語を学習している学習者がいたためクラス内でレベルに差があるということを知った。クラス内でレベルの差があることは教師にとっても教えることが難しくなる為苦労が多くなると考えられる。なぜなら上級のクラスで上級の授業を用意してもついていけない学習者がいるためその学習者に合わせるために学習のレベルを広く設定する必要があるからだ、このようにレベルに差があることは日本語学習の現場においては良くあることだという日本語教師として実際にクラスを任されたときはクラス内の学習状況も注視して授業を構成して行かなければいけないことを学んだ。

インドネシアの国民の多くはイスラム教を宗教としている。私が滞在したマランもイスラム教を信仰する人が多くいるが、マランはキリスト教を信仰している人も多くいる。実際、街にはイスラム教の礼拝所がある一方で、キリスト教の教会などもあった。しかしスーパーマーケットを見てもイスラム教の信者が多い関係かお酒や豚肉は売っていなかった。マランは多くの教育機関が集中するいわゆる学園都市としての役割を持つ都市であるそのためインドネシア各地から学習者がマランに集まりそれぞれ違った文化を持ちながらも共生している。マランという街は様々な宗教や文化を持つ多様性に富んだ街だと思った。様々な人がいる関係なのか私たちが街を歩いている時や車に乗っている時も日本人を物珍しそうに見ながらも親しげに接してくれる。寛容な人が多い街であると感じた。

インドネシア滞在中ブラウイジャヤ大学の学生がチューターとして手助けや、街案内をしてくれた。その学生たちとは色々な話をした。日本語を学ぼうと考えたきっかけはアニメなどの日本文化に興味を持ったからと答えた人が多かった。中には私よりも日本文化に詳しい学生がいて驚いた。よく海外に行くと自分の価値観が変わると言われたが、私はインドネシアに行くまで海外に行った経験がなかったため深く理解することができなかった。しかし、実際にインドネシアで学生との交流を通して違う文化や価値観に触れることで今までの自分の考え方とは違う可能性を知ることができ視界が広がったような感覚を覚えた。日本に帰って勉強に取り組む時や仕事をする時の姿勢や考

え方が変わったのを感じこれこそ世間で言う海外に行って価値観が変わると言うことなのかと感じた。

今回のインドネシアの交流を通して日本語教育に関しては今まで授業で習っていたことと実際に現地の教育の違いを知ることができたこととインドネシアでの生活や現地の学生との交流を通して自分の価値観が広がったことを得ることができた。



学生食堂で（後列左から二人目が私です）

日本語教育現場体験報告

～国際交流基金関西国際センターでの異文化交流～

人文学部／科目等履修学生

中村ちひろ・能戸麻紀・門間未来／前山若菜

プログラムの概要

今回参加した「日本語教育現場体験」は、インドネシアの日本語学習者や日本語教員を対象にした研修プログラムの一部に参加させて頂くというものであった。

参加させて頂いたのは「東南アジア日本語教員養成大学移動講座（インドネシア）」という研修である。これはインドネシアで日本語教員を輩出している大学の教員と学生を対象にした研修で、学生は主に日本語力向上や日本理解・異文化理解を目的とした授業の受講や活動を、教員は主に課題遂行型の活動を取り入れた教授法の学習、リソース収集、授業見学などをそれぞれ目的として行われるものである。2019年1月10日～2月23日の約6週間の日程が組まれており、私たちはそのうちの3日間（2月6日～8日）を現場体験の場として提供して頂き、実習を行った。

「若者言葉」の授業

今回の研修では、最終日である3日目に日本人研修生による模擬授業を行う。テーマは「方言」と「若者言葉」の2種で、さらにインドネシア研修生の習熟度に合わせて3段階にクラス分けされ、私たちは初中級クラス（N4～N3相当）の「若者言葉」クラスの担当に決まった。

事前の教案作成では、まず最初に全員で「どの若者言葉を教えるか」について検討した。このとき重視したのは、①流行に左右されず使用でき、汎用性が高いこと ②広く一般的に「若者言葉」として認知されているもの、という点である。若者言葉は流行り廃りのサイクルが激しく、また、所謂ネットスラングのように特定の界限だけで話されている言葉も少なくないためだ。それを念頭に置き全員で選定を行い、「やばい」「わかる・それな」の3語に決定した。そして、これらの習った語彙を実際に使ってみてもらうために授業は会話中心に展開することに決め、楽しく積極的に取り組んでもらえる工夫として、某TV番組の「サイコロトーク」を参考に会話タスクを考案し、実際にやってみてもらった。これは二人一組でサイコロを振ってもらい、サイコロの出目に応じたテーマで会話をし、それに対する相槌として「やばい」「わかる・それな」を使ってみようというタスクである。会話のテーマは、「日本に来て驚いたこと」や「最近の嬉しかったこと」など、なるべく簡潔で初級者でも答えやすいものを設定した。

当日の授業では、学習者のレベルを考慮して極力難しい語彙を使わないことと説明の言葉を簡潔

にすることを徹底し、教師側の言葉のコントロールに特に気を遣った。語彙の一通りの紹介の後、説明の一環として事前に作成した短いスクリプトを寸劇形式で学習者に見せた。これは実際の使用場面を見せることで単語の意味をわかりやすく直感的に理解してもらうのが目的だったが、「ネイティブ同士の会話サンプル」として貴重な資料だということで、見学参加の先生方が寸劇の動画を撮っていたのが印象的だった。

学習者の中には、その場で話すのが少し恥ずかしいと感じている子もいたようだが、何度か繰り返すうちに慣れてくれたようで、しっかり会話に参加してくれていた。学習者からも「こういう使い方で正しいですか？」と確認の質問が寄せられ、楽しく積極的に取り組んでもらうという目的が果たせていたことを実感できた。見学参加の先生方も含めて楽しんでもらっていたようで、「楽しい授業をする」という当初の目標が達成でき、十分に成功したといえる結果だった。

研修生たちの反応、コメント

参加したインドネシアの学生と先生方を含め、「とても楽しかった」「わかりやすかった」という声が多数寄せられ、本当に安心したし嬉しかった。先生方からは「日本語ネイティブの若者同士の会話は、インドネシアでは目にする機会が少ない。会話サンプルという意味でも、会話の寸劇はとても役に立った。自分の授業内でぜひ使わせてほしい」とのお声も頂戴し、実にやりがいのある研修だったといえる。

また、インドネシアの研修生だけではなく、当日同じクラスを担当した立命館大学からの参加者からも「自分たちは座学重視の内容で授業を考えるのが普通だと思っていたので、今回の授業を見て「こんなやり方があるのか！」と驚いた」という感想や、関西国際センターの専門員の先生からも「ここまで会話に特化した授業は初めて見た」という感想を頂いたことで、自分たちのやり方が珍しいものなのだという気付きを得られた。やっていた私たちにその自覚はなかったので、意外な反応だった。

各自感想

日本文化学科4年 中村ちひろ

今回参加したメンバーは全員、「実際の初級学習者」に向けて授業を行うのはこれが初めての体験だった。私自身、模擬授業という形でしか授業を行った経験がないため、説明が長すぎないか、難しい単語を使っていないか等、細かな配慮に苦心することも少なくなかった。恐らく全員にとって、教案準備の段階が一番の難所だったのではないだろうと思う。当日まで不安は尽きなかったが、学習者のみなさんには楽しんで頂けたようで本当に安心した。また、他大学チームの授業を見学することで「なるほど、こうか！」と自分の中の引き出しを増やすことができ、貴重な経験を積ませて頂いた。将来、日本語教員として実際に勤めることになった際には、今回得られた貴重な経験を業務の中で活かしていきたいと思う。

日本文化学科4年 能戸 麻紀

3日間、たいへん貴重な経験をさせていただきました。インドネシアの方々は皆さん明るく人当たりがよく、交流がスムーズで楽しいものになりました。プログラムの他に、ともに食事をした

り、大阪の市街地を観光したりしました。別れ際に贈り物をくださった事も印象的です。私たち北海学園大学の学生以外にも、様々な地域から大学生が参加しており、同じ日本語教師という職業に関心を抱いている学生と交流も図ることができたことも良い機会でした。卒業後には、今度は自分が海外へ赴き、日本語教師として貢献したい、という気持ちが強まりました。

英米文化学科 4年 門間 未来

2泊3日の短いスケジュールであったが、日本語学習者と授業内外で交流ができた。私は講義外で教案を作るのも授業をするのも初めてだったためとても緊張したが、インドネシアの学生や教員の方々はみな明るく意欲的で、楽しく研修を終えることができた。また、かかる費用も通常の留学より安く、インドネシアの学生以外にも、各地から集まった日本語教員過程をとっている学生とも交流ができ、どのような教案を作ったか、他大学ではどのような講義があるかも聞くことができた。今回の体験は教案を作成する必要があるため、過程受講前の学生には少々難易度が高いと思われる。そのため日本語教育教案作成を一通り学習し、長期の留学やボランティアをする前に感覚を掴みたい学生、今後の進路を悩んでいる学生には是非お勧めしたい。

日本語教員養成課程 科目履修生 前山 若菜

教授法Ⅰを受講して、実際に授業をすることに興味があったので現場体験に参加しました。インドネシアの大学生は、目がキラキラしていて眩しかったです。インタビューや交流会があり、不安があった学生同士のコミュニケーションも自然にとることができました。授業計画は、事前に教授法Ⅲ、Ⅳを修了していた他の三人に頼ることが多かったのですが、この体験で翌年度日本語教育課程の履修を続ける励みになりました。社会人と学生を両立して、1週間以上の教育実習に行くことが難しいのですが、貴重な機会をいただいて感謝の気持ちでいっぱいです。日本語教育に携わりたいという思いを強くしました。本当に、ありがとうございました。



上：最終日に撮った集合写真。研修参加者とお世話になった専門員の先生方との一枚。
下：模擬授業の様子。写真左奥から門間、前山、能戸、中村。

北海学園大学
日本語教員養成課程報告書 第6号

編集 北海学園大学日本語教員養成課程委員会 (委員長 中川かず子)

発行日 2020年3月27日

発行 北海学園大学日本語教員養成課程委員会

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号

TEL (011)841-1161 (内線)2621 (中川研究室) / FAX (011)824-7729

